コロナ渦カリー屋ナマステ別館堂主人

掌編小説集

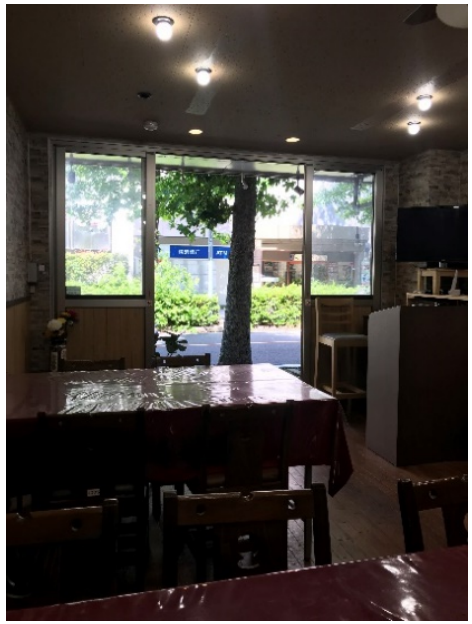
（合本）「子、親を選べず」

「新四部作」版

うときゅう　いっき

序

「ナマステ別館」堂の主人



ろくすっぽお客さんの来ない、カリーレストラン「ナマステ エブリバディ」のお隣、ナマステ別館ですが、たまにお食事をするでもなく、ドリンクをお飲みになるでもないお客様が結構、ふらり、ふらりとお越しになります。

団地再生機構のエージェントの方だったり、タウン誌の記者さんだったり、新聞屋さん、お弁当屋さんや退職された方々など、来られると大体小半時くらいは、よもやま話をしていかれます。

今日は、目の前の通りに車を止めて道を聞いてこられた方が、折り返してきて立ち寄って行かれました。

聞かれたのは近くにある「うさぎ専門店」の場所でした。

珍しいお店なので、飼っているウサギのトリミングにわざわざ高津区から来られたとか。

で、その方がスマホの中にとってある「うさちゃん」の写真を見せるからと（ウサギはトリミングでお店に預けてあったので）スマホを取り出し、その写真を探し始めたまではよかったのですが、何を思われたのか、突然電話をし始め、きくともなく聞いているとなんと「借金の取り立て」だったのです。

スマホを握っている手元を見ると約一本指がありません。

「えっ、なんやの？何話してはるの？えっ、こんな話聞いとって、ええのん？ヤバないの？」

兎に角世の中にはいろんな方がいらっしゃいます。

しかし、そうした方々に門戸を開放して、得になるのか損になるのかわかりもしない話を聞いて楽しむ。

自分は本来、そういうことをしたかっただけなのかもしれないのかなぁ？と、ふと思いま

した。

でなければ、ろくすっぽお客さんも来ない開店休業状態がもう1年半も続いていて、丸々大損もいいとこの、こんなお店を続けられるわけがありませんし。

多分自分は、この「ナマステ別館」堂の主人役が、大層、気に入っているのだろうなぁと思いました。

起の章

その一

真之介君は、時々自分のお父さんが少しおかしいんじゃないかなと思うことがあります。
仕事は一生懸命するし、ご飯もちゃんと作ってくれるけれど、突然
「なんで鳥は空を飛べるようになったねぇやろ、なぁ?」
等と言ったりするからです。
真之介君にしてみれば
「空を飛ぶのを鳥、言うて、飛ばんのを動物というねぇやないの?」
くらいにしか思っていなかったからです。
それにそんなどうでもいいような事を考えても仕方ないし、とも思っていたからです。
しかしお父さんは更に続けて
「鳥に羽がなくなって地上を歩く動物になったねぇやったら未だ分るねぇやけど、ものの本によれば順番はその逆や、と書いてある。なんで動物の手足が羽になったねぇや?何で空飛ぶ必要があったねぇやろか?それってどんな場合や?」
こうなるともう真之介君には返す言葉がなくなってしまいます。
仕方がないので、この辺からは
「又、始まった。勝手にさしとこぅ」
と肩をすくめてしまいます。
でも、お父さんは未だ諦めません。
「そっかぁ、ムササビや。木から木へ手足の間にあるマントを広げてグライダーみたいに滑

空するムササビの、あのマントの部分が突然変異して、二枚マントになり、又変異して三枚、四枚、複数枚の果てに羽になった。そういう奴だけが残って、ふぅんでもって、パタパタそれを動かしたら、グライダーじゃなくて飛行機みたいに操縦できる事に気づいた、餌もその方が採りやすかったねぇやろ、きっと、それや、きっと」

見るとお父さんの顔には晴れ晴れとした満面の笑みが浮かんでいます。

「あちゃぁ」

真之介君は思わず自分の額をぺたんと叩いてしまいました。

そうしてだんだん不安になってきてしまい

「ねぇ、おとん、そんなことより自分、塾にいかんでえぇの？みんないっとぅで？」

と思わず訊いてしまいました。

するとお父さんは

「塾？塾、行っても、なんで鳥が空を飛ぶようになったかとか、教えてくれへんねぇやろ？疑問抜きで、いきなり解き方から入るやぁろ？

あと、解く時間の早い者勝ち競争やろぅ？

そんなん、学校卒業してから解けることやってあるやぁん。いつか解けたらえぇねぁで。

その方が、考え深こぉうなって、えぇやん。

せやから、わしみたいのは、いつも置いてけぇぼりやった。

そねぇな処、金払ろぅていって、どぅないすんねぇや？つまらんから、やめとき」

真之介君は何だかだんだん怖くなってきました。

「昨日教わった小六漢字で言えば、即効性且つ有効性まるでなし。

話にならんわ」

このまま行ったら、自分の「将来」はどうなってしまうのだろう？

誠君のうちみたいなお金持ちには「絶対に」なれっこない。

そう思うと真之介君は、自分のお父さんを取り替えたくなってしましました。

その二

「真之介、お前時々、いろんな言葉が混じるな。お前、なんか変。一体どこの生まれだ？」

ある日、お金持ちの誠君に真之介君はそう訊かれて自分でも驚いてしまいました。

「えっ？」

そういえば、いつの間にかお父さんの話し言葉が自然と耳につき、それが最近口をついて出る様になっている事に、その時初めて気づいたからです。

思い出してみると、東京生まれで東京育ちのお父さんが、ある日突然関西弁を喋り出したのは、同じ関東生れのお母さんがお父さんと真之介君をおいたまま家を出て行ってからでした。

それは、突然家の中に関西のヤクザと漫才師が同居するようになったようなものでした。

元々何をしでかすか分らないお父さんだったので「又、気まぐれを始めた」理由を訊いても「相変わらず訳の分らない答えが返ってくるだけだ」と思い、放っておけばそのうち元に戻るだろうと黙っていたのですが、案に違いそれ以降、東京言葉が家の中からすっかり消えてしまい、いつの間にか、その口調の良さから自分も時折、関西弁を口にするようになっていたのに気づかなかったのです。

「そういえば、この前、お前の家に行った時に「真之介君いますか？」って訊いたらお父さんが「おらんが、苦しゅうない、近ぅ寄れ」だって。ウィルスが頭まで行っているよ、あれ」と誠君は自分の頭を指さしました。

元々変だとは思っていたのですが、全世界的に見ても変に見えるのだとすると、いずれ自分も変な奴にみられる可能性かある事に気づいた真之介君は、之は一本釘を刺しておかずばなるまいと思い、夜の帰宅を待って「一言申し上げる」事にしました。

「おとん、東京生れのくせに関西弁なんか使うの、やめてよ。僕まで変に見られるから!!」

するとお父さんは
「常識に囚われたらあかん」
と早速訳の分らない事を言って来ました。
「何のこっちゃ？」
真之介君も負けずに言い返しました。今回ばかりは自分の利害が関わっていたからです。
「何も生涯、生れた土地の言葉を話さにゃいかん言う事はないねぇや。自分キャラの感情表現に合った話し方、言葉を使えばえぇだけや。語呂が良くて喧嘩にもならん関西弁が一番話し易いと気がついた。で、そうする事にしただけや。TPO、その時の気分で相手に伝わり易い言葉は刻一刻、変わっとぅね。
偉ぶっている奴には河内弁、ここはピシッとには九州弁、女子供には大阪弁、公の場では関東弁、漢語に時代劇言葉に外国語、あるものは何でも使ぃ、や。ほっときゃ自然に多言語になる」
真之介君は話を聞きながら、口があんぐりと開いてしまいました。
そんな意見は生れて初めて聞いたからです。
「人は常に同一である必要はなぃんやでぇ。多重人格という事ではのぅて、その時々に合せて、千変万化の多面であってえぇのよ。その方がおもろいし、楽しいやんかぁ。そう思わん？」
そう言われて真之介君は、はたと考え込んでしまいました。

その三

真之介君はお父さんとバスや電車に乗るのが嫌でなりませんでした。
それと言うのも、全くの初対面で見ず知らずの人でも、行儀が悪いと平気で怒ったりするからです。
お父さんの行っていることは間違ってはいないのですが、横にいると顔から火が出る程、恥ずかしかったからです。
なので、大抵はいろんな言訳を付けて成る丈バスや電車に一緒に乗らないようにしていました。
しかし、どうしても言い逃れできない時もあり、そんな時に限って「叱りつける現場」に出くわしたりするのです。
その日も駅に向かうバスの中で中学生くらいのお兄さん達が通路一杯に荷物を置き、足を投げ出したままゲームをしているのを見かけるや否や辺りをはばかる事なく
「くらぁ、てめえらどこの学校のもんじゃい。お年寄りがたっていらっしゃるのに、おのれらぁ、そんな格好してふんぞり返っておってえぇんか。あん?学校で一体何を教わっとぉのじゃぁ!!」
と大一喝。
赤の他人はおろか、親にさえそんな事を言われた事がなさそうなお兄さん達は、一瞬にして凍り付き、そそくさと居住まいを正して席を空けて、荷物も片付けました。
「全員立たんでよか。おばちゃんは一人やけん」
そう言うと何人かを座らせた後、今度は杖をついたおばちゃんに
「おばちゃん席、空いたで。学生さん、譲ってくれはった」

というと、杖をついたおばちゃんを席に座らせました。
しかし、おばちゃんは却ってばつが悪そうで、お礼を言うどころか迷惑そうな顔をしていましたが、お父さんは一向に気にする様子はありません。
バスが駅に着いて降りた後、お父さんは真之介君にいいました。
「連中もあかんが、それを見て見ぬ振りして何も言わん周りの大人はもっとあかん。誰も注意せんから、あの子らも、そんなに間違った事しているとは気づきもせんねぇやろう。今の子を台無しにしとぅのは、わしらおとな世代だわ」
確かに行っている事自体は、先にも述べたようにいつも正しいのですが「現場に遭遇する」と居ても立ってもいられない位、恥ずかしさに全身が覆われ、思わず又
「この人僕のおとん、ちゃいますぅ。しらん人ですぅ」
と叫んで逃げ出したくなってしまうのです。
そういえば、以前お父さんは、自分の小六の時代の話で、九州から遊びに来た親戚の中三の従姉妹が電車の中で痴漢に遭った時、痴漢男の手首をむんずと掴んで捻り挙げた後
「あんたぁ、なんば、しちょっとね。ざぁけんじゃぁなかと!!」
と一喝。
それを見て隣にいたお父さんは、赤面して思わずお姉さんから飛び退いてしまったといっていたのに、いつから性格が真反対になってしまったのか、不思議でした。
「一体、おとんは、どこでどうなってもぅたんか」
真之介君は恥ずかしいやら、なんとなく自分が情けないやらで、複雑な気持ちになりました。
そうして
「やっぱり、他のお父さんだったらよかったのになぁ」
と改めて思いました。

その四

真之介君の家では、ご飯はお父さんが作ります。真之介君も偶に作る事がありますが、殆どはお父さんが作っています。

それは、食事作りは大人の役目だからと言うより、真之介君が作ろうとするとお父さんが余りいい顔をしないからです。

何故いい顔をしないかというと

「いやっ!! これ、今、うちが遊んどぅねん。邪魔、せんといてぇ」

なのです。

時々、真之介君はお父さんと自分、どっちが大人でどっちが子供なのかよく分らなくなる時があります。

お金を稼いでくるのはお父さんなので、間違いなくお父さんが大人だとは思うのですが、素振りや仕草を見ていると、はっきり言ってお父さんの方が「ガキンチョ」にしか思えない事が多々あります。

お父さんは時々

「わしの天職は主婦や。料理好き。お掃除好き。洗濯好き。お片付け大好き。絶対天職は主婦やで。わしみたいの嫁にしとったら、そりゃ、もぅ。旦那さんは幸せやで。まっ、そねぇな男趣味、わしには、なけどなぁ」

確かにお父さんは、いなくなったお母さんより「数段、主婦」です。

マメにちょこちょこ良く動き回ります。でもそれは、貧乏性と言うより、何だか「整理整頓好き」といった方が当たっている気がします。それも「片付いていないのがイヤ」なのではなく「端からどんどん片付いていくのが、嬉しくてたまらない」といった趣で、最早趣味道楽の様な雰囲気です。

この料理にせよ、主婦が天職にせよ、真之介君にしてみれば、一見「何もしなくてすむから楽ちん」科というと「あれは、すなっ。これも、せんときっ」といわれる方がイヤでしたし「片端から片付けられるのも追い立てられる様で」落ち着かずイヤでした。

お父さん等というものは、多少間が抜けていて、何もしないでゴロゴロしていてくれた方が、真之介君にとっては突っ込み甲斐があって、楽しいような気がしていたのです。

「そういえば、おかんが出て行ったのも、案外、おとんに、主婦の座を取られてしもぅたから、かも知れへんなぁ」

そんな子供とは思えない様な感想を抱く事もありました。

そういえばいなくなる前お母さんは時々

「お父さんの真面目なところが、大嫌い」

と言っていたのを思い出しました。

真之介君にしてみればガキンチョみたいなお父さんのどこを見ると真面目という言葉がでてくるのか不明でしたが

最近ふと思ったのは、

「おかんは、料理本を見てきちんと測って食事を作っていたけど、おとんは、何も見ないで、適当に作っていた。一見おかんの方が几帳面に見えたけど、何となくいやいや作業をしている感じだったのに対して、おとんは、納得するまでやっとったし、たのしそうやった」

その熱心さの事を「真面目」といって圧迫を感じていたのではなかろうか?なと。

確かに、おとんがいると「女子供の鏡が隣にいる」様で、おかんは主婦の座を、自分は子供の座を奪われた様で、余り良い気分にはなれなかったのです。

注）写真は「極主夫道」より

その五

真之介君自身もそうですが、いなくなったお母さんも近所の人たちも、真之介君のお父さんの事を何となく下に見ている様な処があります。

いつも何かを探してキョロキョロ落ち着きがなく歩いているせいか、声が大きく見てくれも余り知的とは言えない風体のせいか、将又その道のお兄さん方も顔負けの強面（こわもて）のせいなのかは分りませんが、軽んじるというより何となく皆避けているみたいです。

なのに、不思議なのは暫く見かけず忘れていると、無理難題程面白がるお父さんは知らぬ間に何かを身につけていたりするのです。

お母さんは料理が出来ない事でお父さんを馬鹿にしていましたが、いつの間にか料理が出来る様になっていましたし、真之介君自身もお母さんのそんな見方の影響からか、特にこれといった事もないのにお父さんを少し軽んじている処がありました。

ところが最近、知らないうちにお父さんには多くの外国人の友達が出来ていて、傍で聞いているとそれなりにそう聞こえるその国の言葉を話たりしていました。

あと、真之介君自身がもっと驚いたのは、大人にせよ子供にせよ、日本人は殆ど誰も見向きもしないお父さんなのですが、その強面にも拘わらず外国の人達は、大人にせよ子供にせよ、むしろ興味深そうに近寄ってきて、知らないうちに親しげに話していたり、犬とか鳥とかが、何故か好物の匂いにでも誘われた様に近寄って来たりする事でした。

さらにはここの住宅街ではそんな事はないのですが、下町の商店街なんかに行くと、お父さんは真之介君と同い年くらいの子供達と気づかないうちに仲良くなっていて、それを見ると同年代のプライドからか、真之介君は「大人風情に自分の領分を侵された」様な悔しさを覚えたりもしました。

そうして
「普通子供の方がお気楽で大人の方が難しい顔をしとぉのに、なんで家とこだけ、反対になっとぅ？」
しかしよくよく思い出してみると、他の子の家は友達の子供も親の大人も何となく「皆大人みたいに知らん顔をしている」事に気づきました。
「やっぱし、おとんだけが変なんやぁ」
真之介君はまたまた「他の家の子に産まれればよかったなぁ」
と思いました。
「でも、子は親を選んで産まれて来られん、て、誰か言ぅてはったしなぁ。辛いモンがあるわなぁ」
ですがお父さん似で、諦めの悪い「理屈っぽ」の真之介君は、そこから更に考え
「子が親を選べんねぇやったら、あぁここに産れてきて良かったなぁと最期に思える様な親に、親自身がなっていてもらわんと、困るやないの、お子達が」
と結論づけました。
で、その日真之介君はお父さんに言いました。
「うちだけ皆と、違ごてるから自分結構苦労しとんねぇやぁ。外で。ちっとは子の事も考えてくれなぁ」
するとお父さんはこう答えました。
「さよかぁ。えぇこっちゃないかぃ。苦労はなんぼでもせぇや。そのうち大きな実がなるさか。苦労を楽しんで来」

（おしまい）

承の章

その一

真之介君も小学校６年。
そろそろお年頃になっていたので子供の作り方や、子供を作る前の「とっても気持ちが良くて楽しい事」にムラムラと興味が沸いてきて、実際にはまだ自分自身でそれを試した事はなかったのですが、そのシミュレーションとしてこっそりパソコンでストリーミング版の「お宝ビデオ」を見る様になっていました。
ところがある日自分の部屋で、心臓ドックン、バッコンしていた処に突然お父さんがノックもせずに入ってきて
「おい、真之介、わしのパンツどこ行ったか知らんかぁ？？？
んっ、おまえ何やっとぅ？何で慌ててパソコン閉じた？あん？」
「う、うっ、うっ」
と、真之介君が冷や汗たらたらで、ドギマギしているとお父さんは
「何も隠さんでえぇわ。お宝ビデオ見とったねぇやろぅ？みるなら堂々と見ぃや」
と思いがけない事をいいました。
そうして
「わいも、大好きゃでぇ。そもそもＨ、せんねぇやったら、人類の子孫である子供、できひんねぇやから、Ｈが悪かろぅ筈がない。無論相手の同意なく、下にムシロ一枚引かずに押し

倒して無理矢理はいかんぞ。同意の上が原則やが、それにしても「気持ちもよく楽しく且つ人類存続上有意義なそれ」を罪悪の如く言うからおかしぃなる。
エロ話一つした位で大騒ぎするから、妙な犯罪が増えるねぇや。むしろ大っぴらにした方が余程犯罪が減るの、ちゃうかぁ？」
とお父さんは自説を一気にまくし立てました。
いささか呆気にとられた真之介君でしたが、ガキンチョであるお父さんより自分の方が余程大人だと思っている真之介君は
「おとん、そんなこと外でいぅたら、只でさえ「妙な奴や」いわれとぅのに、エロがついたら「どエロ&妙な」奴や、言われるようになってもぅで。ここだけの話で、内緒にしとぉ、さか、外でいうたらあかんでぇ」
「くらぁ、ガキのくせして何を猿知恵働かしとぉのじゃ。思った事はハッキシいぅた方がええねぇや。心身の健康の為にはなぁ。大体、がや、人間、万人に好かれる事など、ありゃせんがね。どんなにできがよぉても、それが逆に妬みやそねみを買ぅ元になぅてまぅ。しやから万人に好かれようなんていぅ事自体、ありエヘン世界を追っ掛ける様なものやから時間の無駄、ちゅうもんやぁ。人気好感度100が満点やったら、わしなんか、1か2やで。何でも100%はないから0とは言わんが、あった処で1か2やで。
しやけど、それで御の字や。それ以上は求めへんさか」
真之介君は又々呆気にとられましたが、今迄とは少し違ってお父さんの事が多少羨ましくなりました。
「そこ迄言えたら、気分えぇかも」
内心密かにそう思いました。
それにしても周りの大人と違っていつも予想外の事を言い出すお父さんに、イササカ疲れを覚えたりもします。
なので、心の中で又
「ほんま、手の掛るガキンチョや、おとんは。フォローが大変やわぁ、堪忍してほしぃわ」
と呟きました。少し無理をして。

その二

「おとぅの言う事まともにききよったら、いい目は見られん」
と思っている真之介君は最近、多少内心の揺れはあったものの、お父さんの話を、大抵は「いなし」「かわし」の「うっちゃり」で外に弾き出す様にしていましたが、ある時、お父さんが面と向かってこんな事を訊いてきました。
日本の人はお父さんの事を大概スルーするので、結構真之介君にお鉢が回ってくるのです。
「真之介、お前だけやねぇが、一体全体己らは、何をそうビクビクして暮らしとぉのや？あん？なんでや？いぅてみ」
之には、真之介君も参りました。
余りにも唐突で且つ的を突いていたからです。
それでも真之介君は、動揺を隠しながらかろうじて
「何やの？突然。何のこっちゃ？よう分らんが」
と返しました。
「わいからすると、老若男女、皆、なんか怖じ気づいとぉいぅか、臆病風に吹かれとぉいぅか、肚も腰も浮き足立っとる様にしか、みぃへんのやが」
「そねぇな事はないわ。おとぅが、勝手気儘すぎるだけの話と、ちゃうんかぃ？」
「己らがビクビクしとぉのは「過剰忖度」のせいや。忖度のしすぎや」
「そんたくぅ？って、なんやの？ドンタクなら知っとぉが」
「言われも、頼まれもせんのに、気を回していろいろする、こっちゃ。あるいは、せん、こっちゃ。
見た処、うちらは、政治家と言わず一般ピープルといわず、あらゆる人が日常茶飯事、行住坐臥、夜を日に継いで、この「忖度のプレゼント合戦」と「相手から受ける忖度の値踏み合戦」を日々、街中のあちこちで展開している様な気ぃがするわ。之じゃぁ疲れるし、忖度なんぞという曖昧極まりない物に、全ての土台を置いているとすれば、不安と恐怖でビクビクにも、なるわなぁ。
国民皆保険じゃのぅて、国民皆忖度の蟻地獄やで」

学校の勉強が大嫌いな真之介君は家に帰ってまで国語の授業なんか受けたくなかったので、
ここは八卦に逃げるにしかずとばかり、本当は「ゲームをしに」だったのですが
「おとぅのインチキ国語、なろても、学校で役にたてひんさかぁ、二階でお宝ビデオでも見るわぁ」
と、ハッタリをかますと、お父さんは
「おっ、いつの間にか成長しおったな、真之介」
と上手（うわて）を繰り出してきました。
いやいや、上手などと言う高等技術ではなく、どうやら本心の様です。
またぞろここから別の話に飛火して、地滑り的時間拘束の、それこそお父さんの言う「蟻地獄」に吸い込まれては堪らないので真之介君は思わず
「ほな、上がるわ」
と時限タイマーを強制発動させて、さっさと二階に上がってしまいました。
そこでふと
「おとぅこそ、あれで中々「変形」忖度強要ビームをおかんの後ろから毎日撃ちまくっとったのが、おかんトンズラ原因の一つかも」
と思い
「忖度からかどうかは「?」やが、おとぅも含めて後ろから相手、チョロ見のスパイ駆引き合戦があるのはピンポンかも」
と推理中の探偵の様に頷きました。

その三

「子供は天才」という意味の塾名の書かれた送迎バスを見る度に、真之介君はいつも憂鬱な気分になります。

自分は全然そうではないからです。

お金持ちで勉強がすごく出来る誠君の様な子はそうかもしれないし、もっと小さい子には天才な処があるのかもしれないけれど、もう小六にもなった、お金持ちの子でもない、学校の勉強も普通の出来映えか、それ以下の自分には関係のない話しなのだと思い知らされるからかもしれません。

仕方がないので、幾分自棄気味に、そうして当てずっぽうに

「どこの話やねぇ。塾が、小さい子の親に茶坊主しとぅだけやないかぃ、嘘くさぁ」

と決まって口の中でぶつくさ言います。

そういえば友達の殆どは中学受験で、今頃の時間帯には遊ぶ子もいません。

部屋に籠もるのや、歩きながらゲームをするとお父さんがとても怒るので、仕方なく街をぶらぶら歩いていると、その送迎バスが必ず目にはいるのです。

おまけに今日は学校で 40 点のテストを返して貰った処だったので、更に気分は憂鬱でした。

お父さんは酷い点を持って帰っても、それには誠に寛大なのですが、余りに寛大すぎて、却って「こんなんで自分、この先どうなるのやろぅか」と逆に不安を覚えたりもしたのです。

「なぁおとぅ、どうやったら頭よぅなれるのじゃ？天才と迄はいかんでも、せめて80点位取れる頭にはなっとかんと、この先真っ暗やからなぁ」
「ふぅん。天才とはいかん迄でも、かぁ。随分遠慮深いんやなぁ」
「遠慮深いて、何やねぇん？」
「ならば訊くが、己は天才言う言葉をどう思ぅ？言ぅてみ」
「何やの、それぇ？いきなり、何のこっちゃ？よう分らんわぁ。うち、そもそもそんな高望みしてへんしぃ」
「益々遠慮深いのぅ。えぇか、真之介。世に言う天才とは世界に抜きん出た才能の事や。しかし「天才」という語は「天賦の才」つまり天が「その人に賦与した才能」の略やと考えると、天賦の才は誰にでも備わっていると言えるやろぅ？大なり小なり、高低問わず、何かしら備わっとぅ言う意味では、平等や」
「ほんまかぁ？平等言ぅても、勉強やったらはっきり差があるやないの。わし、完ペケやでぇ」
「それはな、学校の勉強やら、金儲けやらの狭い畑にだけ限るから、その「向き不向き」で「出来不出来」ができるのや。せやけど世の中に畑なんぞ、他にも山程ある。それを見つけて、きちんとピンフォーカスすれば「自分の畑」やからこそ、誰しも己が最先頭で最高エキスパート。他の人は追い越せんし真似も出来ん」
「そんなん、あるの？そんな、出来る？」
「気づかん、だけや。というより探しもしてへん。探す前に大人に仕切られるし、子らもそれが既に仕分けや、と気づかんまま、皆が限られたヵに殺到するから争いが起きる。バラけたらえぇだけの話や」
真之介君は「一理ある」とは思いましたが「で、その先何をすれば良いのか」さっぱり分りませんでした。

その四

口ではあれこれぶつくさ言っている真之介君でしたが、正直な気持ちを言うと、お父さんといるのは、満更でもありませんでした。
気を張らなくて済むし、カッコも付けなくて済む。気が楽で結構話が面白くもある。見ていると漫画の実写版みたいで、飽きが来ない。
しかし、自分がそれと同じ事を学校や友達の家でやる勇気はありませんでした。
曰く
「あれをそのまま外でやったら何を言われるか分らない。分らないどころか、村八分にされてまぅ」
なので、真之介君は外に出る度、自分の振舞いをどうしたら良いのか、いつも迷いながら歩いていました。
そんな自分のフラつきから来る居心地の悪さからお父さんを改めてみてみると
「あれはあれで、結構勇気がいるねぇやもしれんなぁ」
と思う事もありました。
それである時、真之介君はお父さんに尋ねました。
「おとぅ、おとぅは人の目とか気にならんの？仲間外れとか、怖ぉうなぃん？」
するとお父さんは

「んっ？なんや又、改まって。熱でもあるんちゃうかぁ？」
「平熱や」
「で、又なんでそねぃな事、訊きよる？」
「おとぅみたいに脳天気に暮らせたら、楽やろぅなぁ、思ぅて」
「真之介は、楽やなぃんか？」
「楽やなぃ、言うよりなんやら、ふわふわ、グラグラ落ち着かんねぇや」
「さよかぁ。そりゃ、難儀やなぁ」
「おとぅは、昔からそんな、やったん？子供の頃から」
するとお父さんは暫く思い出す様な目になってから
「うんにゃ。子供の頃は、親戚の集まりで、みんなが海老を生きたまま食べる「躍り食い」するのを見て、泣き出したりしたものやから、その時以来、弱虫がんちゃんとか臆病風の雁之助とかいわれよったなぁ。学生時代にも、アルバイト先の社員の人から「社会のお荷物でしかないなぁ、お前」とよく言われたし、勤めにでるようになってからは上司に「何度いったらわかるんだ。何故マニュアル通りにやらん？自分流でやるな」と怒られてばかりで、自信の「じ」の字もなかったわ」
「へぇ、意外なやぁ。知らなぁんだ。せやけど、いつから180度変わってもぅたんや？今の羽目外しでお気楽満載のガキンチョタイプに」
「ガキンチョ？なんや、それ。わしは大人や、ぞ」
「まぁ、細かいことは気にせんで」
「そんな自分が、や、ある時命に関わる様な大手術をする事になったねぇや。麻酔が醒めて目を開けた時にこの世の景色が見えるか、もうそのまま見えないで終わりか、いぅようなやっちゃ、な」
真之介君は、知らない間に身を乗り出していました。
「己は未だ小さい頃やったから、覚えてひぃんやろ。父ちゃんが三ヶ月位、家にいんかった事」
「おらなんだぁのは、おぼえとぉ。しやけど、おかんにおとぅはどこいったんやぁ？訊いても、お仕事で、いぅてた」
「さよかぁ、心配させとぅなかったんやろぅ」
そこに電話が掛ってきました。
「続きは明日。これから仕事や」
お父さんはそう言い残して出かけていきました。

その五

真之介君は、泊りがけの仕事でお父さんが明日の夕方に帰ってくる迄、丸一日時間があったので、何故お父さんが手術をした後に、それ迄と180度「性格」が変わってしまったのかをあれこれ想像してみました。

「三途の川を一旦渡って、そこからこの世への戻り際に閻魔様から何か教わってきたんやろうか？」

「それとも手術の時に、首回りの脳に繋がる神経のどこかが変わって、性格迄変わってしもぅたんやろぅか？」

等など。

しかし、翌日の夕方お父さんが帰ってきてした、続きに出てきたオチは、真之介君の予想した三面記事のネタばらし的な解説とは全然違っていました。

「要するに、麻酔を打たれたら後は何も分らん、言うことや。手術をしているのは勿論、生前の行いに対する、褒め言葉も聞こえん代わりに、悪口も聞こえん。赤っ恥への嘲笑も聞こえんのや。なぁんだ、死んだらこうなるだけなんや。何も聞こえんのや。ほなら、先を怖れて萎縮すぅは愚の骨頂」

「・・・」

「しやったら、悪口なんぞ、気にする必要はない、思い切り自分のやりたい事をやった者勝ち、恥のかき得や、思ぅた。言いたい奴にはいわせとけ。あの世に行って迄聞こえる事は、ないさか、気にせんでえぇ、て」

「・・・」
「さらにさらさら、会社の型に自分を縮こめて、無理矢理自分を当てはめる必要もなかろぅ。窮屈なだけやし。ほなら、いっそ、自分で型を作ればぇぇのと、ちゃうか？いやいや、型も造らんで、ぇぇかもしれん。型いぅ固体ではのぅて、液体か気体でぇぇのかもしれん。こうなると、会社の金看板の庇護塀の外に出て、どうしても、一度は、自分の力を試しとぅなったしもたんや。
それで、会社辞めて今の商売始めたんや」
「ふぅん。ふぅぅん」
「ただな、やりたい事やっても人に迷惑かけたら、あかんで。あかんけど、自分のやりたい事やれば、人に迷惑かけん訳がない。どうしたって人に迷惑をかけてまぅ。そねぇな時は、素直にごめんなさい、といえばぇぇ。それでも許してくれへん、やったら、又一から別の方法を考えて、今一度始めればぇぇだっけや。二度でも三度でも、百回でもぇぇねやで。いけるとこまで行けばぇぇだけ、出来る回数だけやればぇぇだけやねん。それだけの話やねんでぇ」
「おとぅて、ほんまはアホ、ちゃうねんなぁ」
「なんやの、それ。口の利き方に、気ぃつけや」
「苦しゅうない、苦しゅうない」
「近ぅ寄れ、ってか？何やの、真之介。己はお代官様かいな」
最後は冗談で誤魔化しはしましたが、真之介君はお父さんの話にちょっと感動していました。それが恥かしかったので、冗談で誤魔化したのです。
しかし、真之介君は、話を聞いて今迄のもやもやが、何か吹っ切れた様な気がしました。
「人目なんぞ気にせず、したい事を素直にすればぇぇだけなんや、なっ。それだけ分れば御の字や。
ほんなら、今日から、いってこましたろかぁ」
と笑顔で呟きました。

転の章

その一

真之介君は
「そっかぁ、したい事をやればええだけなんやぁ」
と吹っ切れてから、自分が何をやりたいのか考えてみました。
考えると言うより、本当のことを言ったら馬鹿にされると、今まで心の奥深くにしまい込んでいた「やりたい事」を表に出してあげるだけで良い事は直ぐに分りました。
候補がないのではなく、何ものかに「忖度」して自ら取り下げていたのです。
「恐竜の化石発掘調査隊。シルクロード探検隊。動物学者。発明家。皆やってみたいなぁ。でも、どれも面白そうやから、困ってまぅなぁ」
真之介君はウキウキしながらお母さんのいる元の家を訪れました。
真之介君はお母さんのいる元の家に時々行っていたのです。
その日、真之介君はお母さんにとても楽しい気分でやりたい事をやれば良いと、お父さんに言われたことや、具体的にやりたい、なりたいものの話をしました。
すると、お母さんは

「なにそれ?何で IT エンジニアとか AI じゃないのよ?そんなのでご飯食べていけると思ってんの?」
思いがけずお母さんから冷や水をぶっかけられて、真之介君はショックを受けてしまいました。突然、しかも尤も身近な存在の片割れから、今まで無意識に忖度をしていた先の「世間」を見せつけられたからです。将に伏兵でした。
伏兵と感じたのは、同じ話をお父さんにした時の反応は
「うぅ〜ん。どれも甲乙付けがたいなぁ。わしやったらシルクロードの探検やな。なんせ、恐竜の化石発掘もセットでできるからなぁ」
とノリノリだったので、よもやそんな「冷たい」反応が返ってくるとは夢にも思っていなかったからです。
そんな真之介君の心の動揺も知らず、お母さんは更に
「真ちゃんも、もう六年生なんだから、もうちょっと大人になってよ。そして一杯お金稼いで、お母さんに楽、させてよ」
といいました。
「マンションもお父さんから貰ったんだし、他にもお金貰ったって言っていたのに、もうないの?」
「ないわよ」
「なんで?」
「一人分作るの、面倒だから外食ばかりになっちゃったし、女子会の旅行とかで、大分減っちゃったのよ。女は大変なの。いろいろお金がいるの。もう子供じゃないんだから、その位、分るでしょうに」
真之介君は、お父さんとお母さんは随分違うなぁと改めて思いました。
そうして
「良くもまぁこんなんで、結婚したもんやなぁ。なんで、結婚なんかしたんやろぅ?」
と不思議に思いました。
そうして、お父さんとお母さんの間を行き来していると、ある時はお座敷船でのんびり、ある時は突然バイクでぶっ飛ばす、あまりのスピードの緩急に、時々立ち眩みの様なものを覚えるのでした。
「女の子にはモテたぁが、結婚するのは、なんや、ヤやなぁ」
真之介君はまだ小六の子供でしたが、それはとても率直な感想でした。
「真ちゃん、帰ったら、お母さん何か大変みたいだったよ、って言っといて。分った?」
「うん」
ふぅ〜っ、が本当の返事でした。

その二

© Can Stock Photo

「おとぅ、おかん、大変そうやったで。お金ない、言うて」
「さよかぁ。いつものこっちゃな。稼ぐに追いつく貧乏無しや、ねんけど、な」
「何、それぇ」
「経済の大原則や。出費以上に働いて稼いでいれば、お金が足りなくなる事はないぃう、こっちゃ」
「使いすぎ、ちゅう事？」
「結論は、な」
お父さんはお母さんが、金欠になると直ぐにも自分の実家に行ってお小遣いを無心していることを余り好ましく思っていない様でした。
「わしにせびるのはえぇ。別れた後と雖も出た先やからな。しやけど一旦出た親元にせびるのは筋違いやで。線引きの仕方、ちゃうねん。それに40過ぎた大の大人なんやからいつまでもお嬢気分では、困るのよ」
お父さんはそう言って、手元の封筒にお札を何枚か入れて、真之介君に渡しました。
「使うに追いつく金持ち無し、やで、わし」
困った時のお父さんの口癖は「なんやの、それ、堪忍してよ」でした。
一方お母さんの口癖は「大変なの、とにかく大変、私の方が、もっと大変」でした。
国語が余り得意ではない真之介君でしたが「堪忍してよ」と「大変なの」は同じような言葉でも、何か全然違う様な気がしました。

そういえばお母さんが未だ家にいた頃、会社の仕事でお父さんが徹夜明けで帰ってきて
「あぁ、疲れた。堪忍してや」と誰にとはなく独り言を呟くと、決まってお母さんは自分に向けられた訳ではないその言葉を掬い上げて
「大変なのはお互い様。私だって大変なの。私の方がもっと大変なのよ」
と必ず言って苛立ちを露わにしていたのを思い出しました。
それを見ると、真之介君はとても憂鬱な気分になりました。
目に見えない水面下での神経戦、平たく言うとお互いの足の引っ張り合い、隠れ意地悪のし合いっこの様なものを感じたからです。
「おとぅ、何でおかんを結婚したん？」
「まっ、若気の至り、かなぁ。お恥ずかしい限りで、おま」
そんなもんで、結婚。
真之介君は可成り驚きました。
「大人って、結構アホなん、なぁ。しやけど、相当に面倒いなぁ。余り、なりたいもん、ちやうなぁ」
そこ迄考えると、何となく又元のふらふらグラグラに戻ってしまいそうだったので、真之介君は、それを切り替えようとお父さんに質問しました。
「おとぅ、探検隊員になるにはまず何したらええん？」
「科学博物館に行くとか、ネットで調べるとか、まずは、近所の野原を試しに堀り返してみるとかやろうなぁ」
「そんなん、盲滅法に掘り返しても、何かが出てくるとは思えんけど」
「子供の頃、おとぅもそれをしたが、千円札掘り当てた事があったで。最初から諦めたらあかんね。まずは何でもやってみぃや。だめやったら、その時又次の手を考えりゃ、よかとよ。わしみたいに、副産物手に入れる事もあるし。えぇ事は大概いつも瓢箪から駒やで」
「又煙に巻きよる。これはもう自分で考える他、なかぁばってんがさ」
と、真之介君は思いました。

その三

「之は自分で考えるしかない。まずは、自分で考えてみよう」と真之介君が考えをあっさり切り替えることにしたのは、その前にお父さんからこんな話を聞いていたからでした。

曰く

「本を読むのもええが、その前に「まずは」自分の頭で考えてみる事や。できる限り己の想像力と推理力を使ぅてあれこれ、な。偉ろぅ、力付くから。本はその後のリトマス試験紙か修正調味料位でええね。

何よりもまず、己の頭で考えると自分の意見が持てる。視点が持てるのや。おまけに己の頭で考えるから、考えのステップがよぅけ、見えるのや。

わしは昔、入社したての頃に、仕事が解らんで、ノイローゼになった事があったが、ノイローゼで仕事から外されて暇になってもぅて、仕事の本を読んでも、先輩のレクチャーを聴いても頭に全然入って来んし、他に方法も思い浮かばんから、その余った時間使ぅて、一番泥臭く「自分なりの方法で一から考え直してみよう」思ぅてん。人が訊いたら「そんな事も解らなくなっているの」と呆れるレベルからや。

初めは解答不能なアイテム一つを理解するのに優に三ヶ月はかかった。次のアイテムが一ヶ月、その次が一週間。次第に早ぅなって、理解の仕方も自分が一番分かり易い方法も解ってきて、めっちゃ、役に立ったわ。

そして何より、之は無理やと思う様な難問が、自分の力で解けた時の喜びは格別なものがあったなぁ。

「一つ一つ根本に遡って丁寧且つ具体的に考える」急がば回れ戦法や」
「しやけど、自分はおとぅみたいなスッポン的性格、ちゃうし、ノイローゼになる程真面目やないし」
「ほんなら、二弾目のエピソードや」
「まるで、多段宇宙ロケットや、な」
「お前、少しずつ成長しとぅな」
「おとぅでもお世辞言う事あんの？」
「学校を卒業して就職する前に、四国霊場88カ所、1200キロを歩いてお遍路さんした事があったんや。
当時からバスで、ちゃちゃっと手短に回る遍路の方法もあったが、なんや有り難みがない様な気がしたし、車で回ると道端のいろんなもんを見逃すような気がして歩いて回ったのや。ところが世の中には親切な人がおって、な、歩きでは大変やろぅからとわざわざダンプを止めて助手席に乗せてくれたのや」
「ラッキー、やね。楽ちんになって儲かったね」
「勿論それに乗せてもろぅたが、正直悔しくてならなんだ。これじゃ、完全踏破にならん。ズルした事になるぅ、おもぅたんや。しやけで、好意を断る訳にもいかん。ほんま、悔しかったなぁ」
「で、何よ？何が言いたい、ん？」
「んっ？そういえば関係ないなぁ。わしも何が言いたいのか、解らん、なった。単なる思い出話や。呆けてきた。許せ」
途中から話が迷走してしまったものの、真之介君にはお父さんが言いたかった話のキモが何となく解かる気がしました。
「本ばかりに頼るのは、ヒッチハイクばかりする様なものやで」
それがキモだったのだろうなぁ、と。

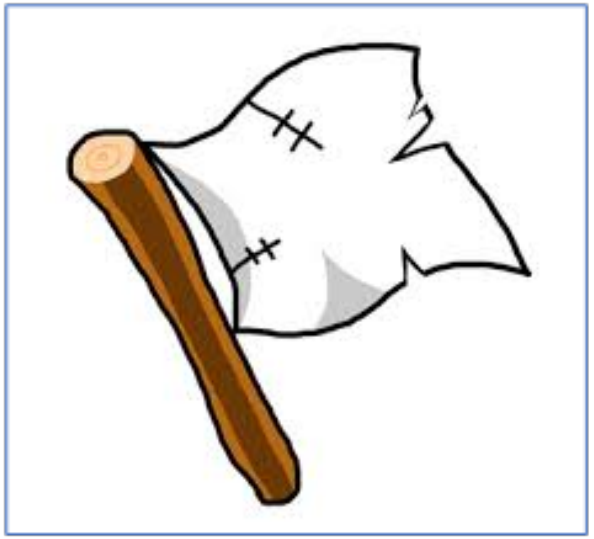
その四

今ではお父さんの方が俄然面白いのですが、まだお母さんが家にいた時は、お母さんの方が断然面白かったのです。
それ迄は、お母さんが元気で、冗談ばかりを言い、お父さんはいつも借りてきた猫みたいに小さくなっていました。それも、何となくおどおどしているような借り猫。
「ねぇ、なんとか言いなさいよ」
といわれても
「・・・」
というのがお決まりの返事でした。
なので、真之介君はいつもお母さんの側にばかりいました。お父さんの側にいてもつまらなかったからです。
ある時、真之介君はお母さんに
「なんでお父さんとケッコンしたの？」
と訊いてみました。子供心にも少し変に感じたからです。
するとお母さんは
「親が言ったからよ」
といいました。
「じいちゃんとおばあちゃんが、言ったの？」
「ばぁば」
「じいちゃんじゃなくて？」
「そう。じぃじは家来だから、女の作戦会議をして決めたの」
「作戦会議？」

「真ちゃんは未だ知らなくていいの。でも、お父さんには内緒よ。秘密の会議だから、真之介隊員は、機密厳守。ね？」
「うん、分った。隊員だから、ね」
「今日、お父さん仕事で遅いから、ファミレスにご飯食べに行こぅか？」
「うん、ハンバーグ頼んでも良い？」
「もち、よ。亭主元気で留守 Best ね」
それが、真之介君が小学校一年の時で、その後、小学校五年の時に二人が家をでて、お母さんはマンションに残りました。
六年生になった真之介君は、その時の事を思い出して、お父さんにこの前の質問を又、しました。
「ねぇ、おとぅ、若気の至りで、って、どねぇな意味？」
真之介君は、隊員だった事を思い出して、お父さんがケッコンした訳を聞くために、ちょっと嘘を付く事にしました。
秘密事項を話すと、お父さんが傷付く様な気もしたからです。
で、
「疑問はとことん調べぇ、おとぅが言うたから、訊くね」
「そっか。近頃、成長メキメキや、な」
「わし、学校の勉強はできんけど、こっちの方は、そこそこ、みたいや」
「Good!!
ほな、例、一。
昔な、一目惚れしたん、わし。おかんが新入社員できた時に」
「へぇ」
「ところがいくらアタックしてもあかんのよ。おもろい先輩がおって、その人を好きだったらし。
で、余りにも難攻不落の要塞状態やで、一旦は諦めたん。
わし、完璧おもろぅないし、無理やな、思ぅて」
「青春やねぇ」
「はっ？何が、青春や。お前、歳、幾つや？
まっ、よか。
それから三月程してから、唐突に「最近ご無沙汰ね。つまんないョ」と書類の間に挟んだメモが来たのよ。突如脳天爆発、で、後はポチ状態。腱鞘炎になる位「お手」させられたわ。
だで、頭に血が上って大人でなくなる事を「若気の至り」いぅん」
しかし、真之介君は
「それて、大人じゃないかもしれんが若気の方がおもろぅて、えぇのちゃう？」
とまず思い
「おかんの大人の作戦会議の方が、何か怪しぃ」

と次に感じましたが、口にはしませんでした。
「大人」の勘でした。

その五

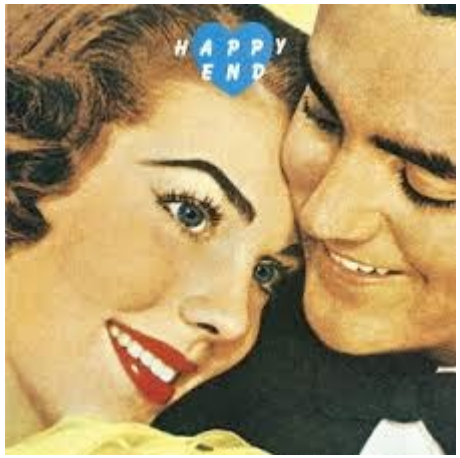


真之介君は相変わらず学校の勉強はさっぱりでしたが「課外授業」の方では、同い年の子に比べるとかなり良いポジションに、着けるようになっていました。
そんな真之介君は、
「最近なんやら自分、おとぅの味方になってばかりで、これじゃぁ少しおかんがかわいそぅやなぁ」
と思いました。
お母さんの事に目が行ったのは、真之介君がお母さん子だったせいかもしれませんし、以前にお父さんが
「なんでも、その正反対「も」考えてみぃ。結構おもろぃ答えが見つかる「事も」あるし」
と言っていた事や
「なんでもどちらか一方が100%という事はない。100%だと思うようになったら、無理にでも100%じゃないように、他のものを咬ました方がえぇ」
といっていたことが何となく頭の隅に残っていたからかもしれません。
そう言う目で見ると、最近のお父さんはちょっと「正し過ぎる」様な気がしました。
正しいのは勿論悪いことではないのですが、時としてそれは相手の柔らかい心を「グサッ」と突いてしまうこともありそうだからです。
真之介君は口には出して言いませんでしたが、時折お父さんから見れば「アッタリまぇやぁ」で「お前の為を思ぅて」の善意、それこそ「100%」の言葉が真之介君の「やっぱり未だ子供の心」を「貫通銃創」して目に見えない血を流したことが結構あったからです。

「なぁ、おとぅ。おとぅて、案外めちゃキッツぅ処、あるわなぁ」
「キッツぅもなるで。今まで各方面から、散々な目に遭わされてきたからなぁ。こうならにゃ、生き残れなんだぁ、だけじゃ」
「おかんは、何故出ていったねぇや？」
「出て行かされたのはわしら二人の方やろぅが」
「そりゃまぁ、そうやけど」
「何が言いたいねぇや？」
「おかんも、なんや、可哀想かなぁ、おもて」
「おかんが出ていんだのは、飼い犬に手をかまれた、おもぅたのとちゃう、か？
全く思いもよらずわしが、態度で「お手、ポチ拒否宣言」したものやから。
仲良しのおかんのおかん、おばあちゃんや誠君ちぃのおかんからしたら旦那のクーデターなんぞ「ありえへん世界」やからなぁ」
真之介君はちょっとびっくりして
「クーデターてぇ、まるで戦争やね。夫婦てぇ、戦争なの？仲良しじゃなくて敵同士なん？」
「ほんまは、対等互恵平等なはずなんやが、何故か我が国では主導権争いになっとるなぁ、どの家でも。そしてどの家でもおかんが勝者になっとぅ」
真之介君は、やっぱりケッコンはしない方が良いかもなぁと改めて思いました。
ポチになるのもイヤだし、家の中のクーデターで毎日毎日陣取り合戦するのもイヤだったからです。
「大人って面倒ぃねやなぁ。大人ってなかなか素直に白旗、挙げられぇひんのやなぁ」
と思った後で、大人だけじゃないことに気づきました。
「わしら子供も、そうなっとぅ。あぁ、ヤダヤダッ、疲れてまぅ」
真之介君は他の子とも、おとぅやおかんとも違う大人になろうと思いました。

（おしまい）

続の章



「転の章」のような締めくくりはよくある締めくくりです。
数多の著作物が、このような締めくくりをして、希望を持たせて終わっています。
しかしその後、実際はどうなったのか？
子供の頃、アメリカ映画を見て「ハッピーエンドの後はどうなったのだろう？ハッピーエンドは、あの後もずっと続いたのだろうか？」という、妙なことに興味を抱く子供だった自分が大人になった今、この物語の中の親子に限らず、我が国初めその他の国々の親子は、その後どうなるのか？
我々が生身で生きている現実の世界では「その後こそ」が重要です。
ですので、今回ばかりは、その先をきちんと見届けないことには、新しいコロナ渦後のニューノーマルはない、と思っております。
ここからは、皆様方がストーリーの作者です。
宜敷、お願い致します。

「ここ迄の」作者

（以降も、つづく）

（著者プロフィール）

うときゅう　いっき

本名　宇都宮一貴（うつのみや　かずたか）

一九五三年東京生まれ。早稲田大学第一文学部ロシア文学科を二回留年の後、卒業。大手電機メーカー商品企画部に二十年間勤務。同子会社経理部等に十六年間勤務。四十歳から五十二歳まで十二年間重度うつ病を罹患。左遷、リストラ、降格、離婚、家族崩壊の後、生還。定年退職後、嘱託社員契約を辞して株式会社うとQを設立。趣味は観察すること、考えること、書くこと、カメラの四つのｋ。著者名は苗字、宇都宮一貴の音読みで、中学校時代の仇名に由来する。

宇宙の「う」
東京都の「と」
宮殿の「きゅう」
数字の「いち」を詰まり音便で「いっ」
貴族の「き」

で、うときゅういっき　となります。漢字にするとかなり御大層な名前に見えますので、敢えて音読みひらがな表記にしております。

ホームページ：http://utokyu.co.jp

（出版情報）

著　者　うときゅう　いっき
発行人　宇都宮一貴
発行所：株式会社うとQ
〒二一五‐〇〇一八
神奈川県川崎市麻生区王禅寺東5丁目３４番7号
電話：〇四四‐九八九‐一六九八
発　売　株式会社　うとQ
編　輯　ナレッジフォレスト（大竹鉄哉）
カバーデザイン&DTP 製作　ナレッジフォレスト（大竹鉄哉）
©Kazutaka Utsunomiya uploaded in japan 2020
発行日：二〇二一年二月二十五日　初版発行
本書の一部または全部について、著作権上、著作権者の承認を得ずに、無断で複写、複製することは禁じられています。

（その他著書）

●「人生終わったなと思った時に読む本」（二〇一五年刊　ソフトカバー在庫僅少）
●「人生終わったな」と思う間もなくトンネルの闇を抜けて広野原（二〇二〇年刊　amazon

kindle）

●「コロナ禍 同時進行執筆 ナマステ別館堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」二〇二〇年壱月の巻～十二月の巻」（二〇二〇年刊 amazon kindle）

●「コロナ禍 同時進行執筆 ナマステ別館堂主人「二年目の ニューノーマル探索サバイバル日記」二〇二一年二月の巻」（二〇二一年刊 amazon kindle）

●（初本）カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「冬のひまわり」（二〇二〇年刊 amazon kindle）

●（改訂本）カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「冬のひまわり」（二〇二〇年刊 amazon kindle）

●コロナ渦カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「子′親を選べず」三部作（二〇二一年刊 amazon kindle）